

「日本語の表音文字化について——手書きからワープロへ」

井 上 道 雄

“On the Increasing Usage of Phonograms (Kana) in Japanese Writing: From Hand Writing to Word Processing”

キー・ワード：ワープロ、書きことば、話しことば、表音文字、分節表記

表音文字化とその問題点

仮名で表記される地名がふえている。埼玉が「さいたま」、磐木が「いわき」に、さらに「さぬき(讃岐)市」「東かがわ(香川)市」「あさぎり(朝霧)町」と漢字がむつかしい(表外漢字)、子どもにもわかる、新鮮なイメージであるといった理由から仮名表記される(Yomiuri2002/02/11)。

日本語の表音文字化とは、地名の表記からうかがえるように、日本語を記述するさいの文字表記がひらがな、カタカナ、そしてローマ字などの表音文字や音素文字が多く用いられるようになってきている現象を指している(井上, 2000)。それは、表意文字である漢字の使用が減少していることでもある。戦後の国語施策の歴史的な流れからみれば、漢字制限(当用漢字表・当用漢字音訓表・常用漢字表)や動植物名のカタカナ表記などが、漢字が仮名表記される傾向をもたらしている。また、単語を現代語音によって仮名で表記する現代仮名遣いは、表記上の表音主義化であり、記述言語(書きことば)から音声言語(話しことば)への移行であり、表音文字化を進める一因となっているだろう。

井上(2000)は、表音文字化による問題点を指摘したが、簡単にまとめると以下ようになる。日本語の表記上の大きな特徴のひとつは、漢字と仮名文字の二文字体系併用であり、世界でもまれな言語の表記になっている(辻, 1983)。漢字仮名交じり文は、形態的(視覚的)に異なる文字体系で表記することによって、分かち書きすることなく読みやすい特性をもっている。漢字(内容語)とひらがな(機能語)の書き分けが、分かち書きと同じような働きをして(佐竹, 1988)いて日本語の文章を読みやすくしており、眼球運動といった視覚活動(神部, 1986)や文節の認知(中條, 1999)などの情報処理過程での有効性をもたらしている。

表音文字化は、このような日本語の表記の基盤をゆるがし、読みの情報処理上の特性に影響

を与えるおそれがある。ひらがなのみで表記された文が、漢字仮名交じり文より読みにくい実験結果が報告されている(懸田・阿部, 1994; 懸田, 1995)が、その原因は、語を文中から分節して認知するのがむづかしいことによる。

そして、日本語が表音文字化していること(おもにカタカナ語の増加)から、表音文字を読みやすくする表記方法について、日本点字の「切れ続き」とカタカナ語を分節して表記する方法の類似性について検討した。点字を対象としたのは、点字が表音主義にもとづいて表音文字のみで表記される記述言語によるからである。点字は日本語(墨字)との比較において、文レベルで漢字仮名交じり文が使えないため分かち書きの表記方法が用いられている。そして、単語レベルでは、長い音節の複合語は、その意味構成単位で分節(分綴)して表記される。それによって表音文字のみで表記された文や語の意味単位を明示し、語としての単一性(統語性)も保たれることになる。このような表記方法は、単語の意味理解を促進し、文章の読み速度や理解力を高めていると考えられる。表音文字で表記されるカタカナ語を分節表記する方法は、これと同じ表記上の効果があると言えるだろう。

本稿では、この拙稿の背景となっている日本語表記の表音文字化について検討する。日本語を表音文字化させる要因、あるいは表音文字化を進行させられると思われる要因について、現在の文字表記に影響を与えている時代的な変化に重点をおいてみていくことにする。

表音文字化を推し進める時代的要因—「書きことば」から「話しことば」へ

筆記具の変化—手書きからワー・プロへ

筆記具の変化は、文章や表記に大きな影響を与えてきた。日本語では、毛筆からペン・鉛筆、そしてワー・プロのキー・ボードからのタイプ入力へと変化してきた。筆記具の変化は、思考や文体や文字表記など筆記行動のさまざまな面に影響を与える。特にワー・プロのキー・タッチによる文字入力、従来の手書きによる筆記行動を大きく変えるものである。手書きによる筆記行動は、筆者が考えた文章を文字表記も含めて直接表現する過程である。そこには、表現しようとする意図から最後の表現段階まで、筆者自身のなかに緊密で一貫した過程をもつ筆記行動がある。しかし、ワー・プロによる筆記行動は、そのような一貫した筆記過程にさまざまな変化をもたらした。ワー・プロは、単なる筆記道具をこえて、「思考の道具」となったといわれる。さまざまな編集機能(文字変換・挿入・削除・きりはり・保存等)をそなえることによって、文章筆記が思考過程により近づいたのではないだろうか。「考えたことの表現」とともに「表現したことから思考」へのフィード・バックがよりやりやすくなったのである。推敲による思考と文章表現が、ワー・プロではより効率的になったと言える。

ワー・プロの出現は、このように従来の手書きによる筆記方法とは質的に異なる筆記行動をもたらした。そこで、日本語の表音文字化の面から、その違いについてまず筆記具としての機能面の違いをみでみる。

手書きは、漢字や仮名で直接文章が書かれる。その点においては、日本語の表記の特徴である表意(表語)文字と表音文字の異なる文字体系が並列的に用いられている。それに対して、ワープロでの入力過程は、まずローマ字(アルファベット)でキー入力される。今日多くのワープロ使用者は、仮名入力ではなくローマ字入力を行っており、学校での情報教育もそのようである。従って、ワープロ入力による文章は、ローマ字である音素(単音)文字で入力された後、自動的に表音文字である仮名に変換され、さらに必要な語が漢字へと変換される。3種類の文字体系がワープロ入力文では継時的に使用される。つまりワープロでは、手書きの表記過程に音素文字の入力過程が加わることになる。この文字過程の介入は、日本語の表記をより表音文字化する一因となるのではないだろうか。

ワープロでの文章入力過程は、「仮名漢字変換」と呼ばれている。それは、日本語の言語単位の意識が、音節文字である仮名を表記の最小単位とみなしていることを示している。森ら(1988)のなかで山根は、ローマ字入力になれてくると「脳の中ではアルファベットを二文字打っているという意識が皆無になり」、そして「むしろ一文字で打つ(仮名入力)と不安になる」といっている。ローマ字入力になった人は、ほとんどこのような意識で文字入力をしているのだろう。しかしその実質は、むしろ「ローマ字仮名漢字変換」である。この筆記過程の変化が、今後どのような影響を与えるかは、いまだ十分な研究がなされていないが、音素文字過程が文章表記に与える影響は、決して小さいものではないだろう。表記面でのひとつの変化として、ローマ字入力は日本語の文章筆記を表音文字化の方向へと導くものと予想される。カタカナ語の急増に加えて、アルファベット表記が多くなっている。特に音楽の歌手名や歌詞でアルファベット(おもに英語)が多用されていることは、あながちワープロ入力の普及と無関係ではないと思われる。

ワープロの文章表記の特徴

ワープロは、表記の面で文章を仮名(表音文字)化するのか、それとも漢字(表意文字)化するのか。先にも見たように表記行動としては、表音化をうながす過程が加わったことによって仮名化するものと思われる。しかし、「仮名漢字変換」過程によって漢字表記がより簡単にできるようになり、必要以上、つまり手書きでは正確に書けないようなむづかしい漢字を使用することもできるようになった。このことは、漢字表記化を推し進める要因となる。

金ら(1993)がおこなった手書きとワープロ文章を計量分析によって比較した結果は、漢字の使用率に差は認められなかった。しかし、ワープロ文章にむづかしい漢字が多く使われる傾向がみられた。また、土屋(2000)は、和語を仮名書きする割合の変化を新聞記事の表記の分析から検討している。それによると1975年をピークにして和語を仮名書きにする傾向が減少し、訓の漢字表記の復活を示唆した。この変化は、ワープロの普及と並行しておりワープロが表記に及ぼしたことによると考えている。

ワープロによる文章表記への影響は、現在の段階ではまだ明らかではない。ただ、ローマ字仮名漢字変換での音素文字過程は、筆記行動においてローマ字(アルファベット文字)や仮名の表音文字への親近性を高めている。そして、この変換機能によって、ローマ字・仮名・漢字の表記形態のいずれを使用するか文字表記の選択性がいっそう高まるだろう。それは、表記の多様化をさらに進めることになると思われる。

書きことばの話しことば化—電子メール(パソコンと携帯電話)の文章

電子機器によるコミュニケーションの手段として、パソコンや携帯電話の普及には目覚ましいものがある。90年代後半からインターネットや携帯電話がブームとなり、NTTがiモードを開始した1999年からは電子メールの使用が急激な普及をみせた。翌年には携帯電話(PHSを含む)の加入者は50%をこえている。このようななかで、特に若者を中心にした電子メールでの文章のやり取りが一般的な筆記活動となってきた。そこで、電子メールでの文章の特徴について表音文字化の視点から見てみる。

パソコンや携帯電話は情報をより個人的な世界で扱うことを可能にした。そして、それらを用いた電子メールの使用は、より個人的なコミュニケーションのやり方をもたらした。手紙とは異なり、即時的に文章が送信される。また、送信には表だった第三者の手をへないで送信先へ直接おくれる。個人間のきわめて私事性の高い通信手段である。このような意味では一般的な文章を代表しているとは言いがたいが、その普及と日常での筆記活動の使用度の高さから考えて、今後の文章表記への影響が予想される。そこで電子メール文章の特徴について検討することは表記について考えるうえにも意義があるだろう。

中村(2001)は、大学生の携帯メールでの表現の特徴として、話すような文体で書かれていて表現が軽佻な口語体であること、絵文字が多用されていること、そして、文章の長さや漢字の使用などの文章表現についてはあまり省略されていない点をあげている。また、メールの内容面での特徴として最も多いのは、用件の連絡というのではなく、「そのときあった出来事や気持ちの伝達」といった自己充足を目的としたおしゃべり的な内容である。したがって、表現とその内容は感情の表出に裏打ちされたものであり、電子メールの個人的で直接的なコミュニケーションの特質が内容をより感情的なものにしている(小林, 2001)。これらの特徴は、携帯メールの文章は記述言語であるが、その内容は音声言語に近いものであることを示している。また、太田(2001)は、電子メールの言語学的な特徴として以下の言語形式を多く観察している。感動詞・間投詞、俗語形・口語形、語順の柔軟さ、音声表現など、話しことば的な特徴である。また、発話の長さからもメールの話しことば的な特徴を指摘している。

メールでの話しことば的な特徴は、メールを利用する世代が主に若者であり、とりあげた二つの研究も大学生のメールを分析したものである。佐竹(1980, 1989, 1991)の一連の研究は、若者雑誌の文章(1980)や読者の投稿文(1989)に字種や語種比率などの計量的分析をおこなって

いる。そして、それらの文章の特徴を「新言文一致体」と名づけた。新言文一致体は、語種比率では和語・外来語が多くて漢語が少なく、また品詞では名詞が少なく副詞が多く、そして文の長さは短いといった特徴である。そこから新言文一致体は、「思いつくまま、感じるままに相手に話しかける」といった話しことば調であり、そこに見られる文章表現の特徴は、感情表出のためのカタカナ表記の多用である。

「書きことば」の「話しことば」化は、電子メールの登場に先立って若者の文章にすでに見られた特徴であった。研究対象がかなり限定されたもの(若者世代であり手紙・メールがおも)ではあるが、電子機器による文章筆記の道具だては今後とも続くと予想される。このことから、「話しことば」—新言文一致体(佐竹)や稲垣(1990)の言う第二言文一致—への傾斜はますます強くなると思われる。この傾向は、今後の文体や文法面での研究がなされるだろうが(川越, 1991; 稲垣 1990)、記述言語への音声言語の侵食は、表記面で文章の表音文字化を強める要因となっていくだろう。日本語の筆記文章が、表音文字化し表記がいつそう多様化していくと予測される。

語表記の変化と受容する意識

語表記の変化

日本語は、漢字仮名交じり文で表記されるが、漢字表記はおもに名詞や動詞などの実質的な意味内容をもった内容語であり、仮名表記は助詞・助動詞などの文法的な役割をになった機能語である。日本語の表音文字化は、この内容語である語彙について漢字表記か仮名表記かの量的な変化をみることによって明らかになるだろう。

まず、文章のなかで漢字表記される語の比率の変化をみってみる。安本(1963)は、1900年から1954の間に発表された100人の作家の小説を分析対象にして、文章に含まれる漢字含有量を調べている。そして、小説文における漢字含有量が、時代とともに減少していることを示した。森岡(1991)は、安本の文字単位での漢字含有量の分析に対して、語単位での漢字表記の使用率—総語数に対する漢字で表記される比率—を調査した。その結果、漢語の漢字表記の比率はあまり変わらないが、和語の仮名表記の増加が漢字表記減少の原因であることを指摘した。それは、和語は漢字表記から仮名表記に移りやすいが、漢語は漢字から仮名表記への移行が和語にくらべてむつかしく、漢語の視覚形態素としての特性が大きいためであると考えている。その他の調査(国立国語研究所, 1987)では、漢字含有率が1970年代半ばまで減少しているデータを示していて、ほぼその頃に漢字含有率の減少が下げ止まりしている。

これらの研究の調査対象は、時代的には1970年代末までの文章についてであり、近年の語表記の激しい変化を反映したものとはいえない。特にカタカナ語の増加は、すでに多くの人の周知するところであり、日本語表記への影響が心配されている。佐竹(1988)は、カタカナ語の急激な増加現象から、漢字使用率(含有率)だけでは文章の表記の実態がとらえにくいことから

カタカナ語の使われ方に注目すべきことを主張している。

佐竹(1988)は、一つの文節が<漢字(カタカナ)+平仮名>で構成されることが多く—野村(1972)の新聞記事の調査から、文節が漢字で始まるもの約70%、平仮名で終わるもの約92%—、それが日本語の漢字仮名交じり文の特徴であることを指摘した。それをふまえたうえで、カタカナ表記される語の役割が、同じ表音文字の平仮名とは異なり、実質的な意味をもつ漢字の内容語と同じであると考えている。このことは、カタカナ語のほとんどが名詞であることから、<カタカナ語+平仮名>の文節が漢字仮名交じり文として受け入れられる文章表記であると言えるだろう。カタカナ仮名(平仮名)交じり文が、漢字仮名交じり文と同じ文章表記上の役割をもっていることである。そして、近年の外来語の急増(井上, 1998)は、この文節単位での表音文字化をいっそう顕著なものにしている。

カタカナ語増加による文節レベルでの表音文字化にくわえて、日本語を表音文字化する方向として、和語は漢字を使わずにできるだけ仮名書きにしようとする考えある。和語の仮名書き傾向(森岡, 1991)はすでに述べたが、また土屋(2000)の示した調査結果とは反対の傾向であるが、近年この傾向が日本語の国際化という時代の流れを背景に強まっている。日本語は、国際社会ではその言語使用人口からいえば、①英語 ②中国語 ③フランス語について第四位の位置をしめている。この日本語の普及は、コミュニケーションに重点をおいた話しことばとしての表記が重んじられ、文章語での役割が大きい漢字に使用制限がかかるものと思われる。また、日本語を国際語化するための条件として、加藤(2000)は漢字からの自由をあげている。「日本語はできるだけやまとことばをつかい、かな表記し、そのなかで「音読み」するばあいにかぎって漢字を使う」といった原則で文章を書いている。同様の考えで、野村(2000)は「和語はカナでかくことを原則とする。ただしよみにくいところは漢字でもかくし、カタカナにもする。・・・たいせつなのは、できるだけ漢字をつかわないことである」と「漢字を使わない日本語へ」を提案している。

表音文字化を受容する意識—世代差

人びとが文章を読み書きするとき、表記についてどのような意識をもっているのか。表音文字化が今後すすむか否かを検討するうえで、ひとつの指標となる。井上(1998)は、カタカナ語の受容では世代間にちがいがあを指摘した。若い世代はカタカナ語を外来語として特別あつかいせず(石野, 1983)、個々の外来語についての調査(文化庁, 1998)でも認知度や理解度において、30代以下の世代で高く、60代以上の高年齢層で低くなっている。また、カタカナ表記について大学生に表記と語種意識の関係を調べた結果(佐藤, 1991)は、カタカナ表記に対して外国語意識が若い世代で希薄化しつつあることを示した。そして、希薄化の要因として外来語の増加による語表記の多様化と脱漢字化をあげている。さらに、2世代(高校生・大学生と中高年)に主観的表記頻度—ある語を漢字・ひらがな・カタカナのいずれで表記するかについて

評定した値一を調べた結果でも、若年層で漢字と仮名書きを同じように表記する傾向がみられた(井上ら, 1997)。

カタカナ語表記の受容における世代のちがいが、表記そのものに限られるならばカタカナ語の増加を抑制する要因として働くと考えられる。しかし、表記以外の対象にも世代間のちがいがあるとすれば、世代差は一般的なものであって、カタカナ語の受容に限られたものではない。新しい対象や概念の受容と同様に、やがて世代をこえて受け入れられていくだろう。カタカナ語の使用は、新鮮さや流行性や専門性といった世代や時代の影響を他の語種(漢語や和語)にくらべて大きく受ける。このことが、カタカナ語の受容に世代間の差を生んでいると考えられる。もしそうならば、この世代間の違いはカタカナ語に限ったものではないだろう。そこで、カタカナ語の特性である流行性や専門性をもつものとして情報機器における世代差と比較してみる。東京大学社会情報研究所編(2001)のコンピュータ・メディア系情報行動の行為者率は、ワープロ、パソコンなどの情報機器を使用している者の比率を示すもの(2000年のデータ)である。図1は、その行為者率と、文化庁文化語課(2000)が「日常の言語生活に外来語を交えることへの好悪」について調査した世代間の変化を図示したものである。(ただし、19才以下の年代は行為者率が13-19才、外来語好悪が16-19才である)。

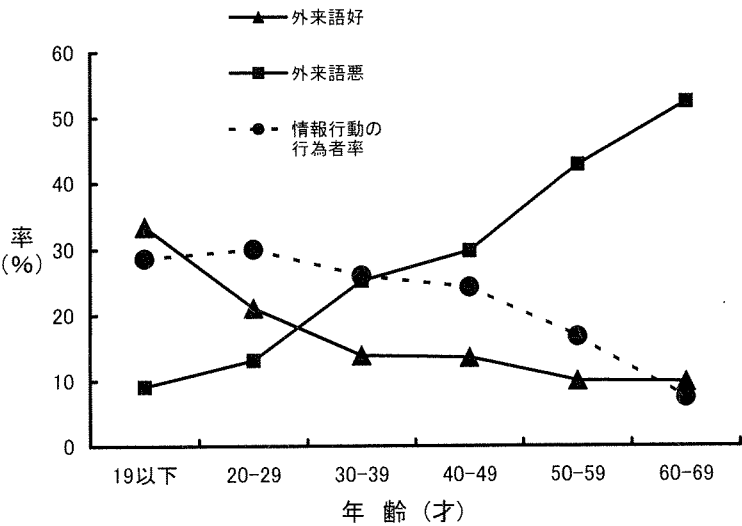


図1 外来語好悪と情報行動行為者(率)

情報行動行為者率は、50代から大きく下がっている(24.2%から16.7%に)のに対して、「外来語を好ましく感じる」は30代と50代で下がっている。両者の相関は、 $r = .676$ と高い相関を示した。また、「外来語を好ましくないと感じる」とでは、 $r = -.954$ ときわめて高い負の相関を示した。外来語への好悪感と現在の情報機器を代表するコンピュータ・メディア系情報行動

為者の間に高い相関が見られることは、世代間のちがいが必ずしも外来語だけに特化したものではないことを示唆している。

カタカナ表記される外来語の使用は、高齢者に対してはこれらの調査結果からでもできるだけさけるべきであり、また理解しやすい工夫が必要となる。しかし、カタカナ語の使用を制限することは、現在のカタカナ語導入の大きな流れ(井上, 1998)からはいへん難しいことであろう。中山(2001)は、厚生省がカタカナ語の使用を適正に(つまり制限)しようとした試みを『厚生白書』(平成10年版と11年版)でどのように実現されているかを分析した。しかし、カタカナ語の適正な使用からは遠く、厚生省の取り組みは必ずしも前進しているとはいいがたいものであるとしている。このような意識的な取り組みにおいても、カタカナ語使用を制限することのむつかしさを示した。カタカナ語の増加は、語単位でみれば特定の語での急激な使用頻度の増加によってもたらされていることでもある。「ケア」「デイ・サービス」「ホーム・ヘルパー」などは、ここ数年で一般社会にかなり浸透している語であり、あえてカタカナ表記を制限(適正化)する必要があるのだろうか。むしろ、使用頻度や意味の独自性を考慮してカタカナ語を受容する基準を検討すべきではないだろうか。

おわりに

日本語は、現在大きく変化している。ことばが社会や文化の変容とともに変化することは人の言をまつまでもないことである。そして、日本語の表音文字化はそのひとつの現象であり、時代的な要因によって影響を受けていることをみてきた。

日本語は、文字を実体とする言語である。しかし、漢字を主体とした「書きことば」から音声を中心とする「話しことば」へとその運用面での移行がみられる。「話すように書いた書きことば」が、小説の世界でも増えている。ここ数年間に爆発的に普及している電子メール(パソコン・携帯電話)は、きわめて話しことばに近い書きことばが使用されている。表音文字化は、カタカナ語のもつ音声や意味的な新鮮さとともに話しことばとしてその軽快感が好まれているのだろう。このような背景のもとに、いっそう仮名文字の使用が増えている。

この日本語の現況を踏まえて、日本語の文字表記の運用面での研究が今後ますます必要となるのではないだろうか。正書法の確立がむずかしい日本語の文字表記面で、さらには多文字体系併用の日本語において、読みやすい文章、理解しやすい文章の表記をめざした実証的研究が必要であると思われる。それは、「文字論」としてではなく、文章表記の情報处理的な観点からの「日本語文字運用論」といった日本語の文字表記の運用面に足場をおいた研究であるだろう。

引用文献

- 文化庁 1998 言葉に関する問答集—外来語編(2)(新ことばシリーズ8) 大蔵省印刷局
文化庁文化部国語課 2000 平成11年度国語に関する世論調査 大蔵省印刷局

- 中条和光 1999 「読み」の認知モデル—日本語文章の読みに関する実験的研究 共同出版
- 稲垣吉彦 1990 キャスターニュースとパブリックスピーキング(梅棹忠夫・小川了編『ことばの比較文学』) 福武書店
- 井上道雄 1997 主観的表記頻度と世代差—高校生・大学生・中高年 神戸山手女子短期大学紀要, 40, 41-49.
- 井上道雄 1998 カタカナ語表記への言語心理学からの提案: 読みやすい語表記をめざして—分節表記 神戸山手女子短期大学紀要, 41, 45-58.
- 井上道雄 2000 点字とカタカナ語分節表記—表音文字化する日本語のなかで 神戸山手大学紀要, 2, 13-22.
- 石野博史 1983 現代外来語考 大修館書店
- 懸田孝一・阿部純一 1994 文の“読み”の範囲と速度について 日本心理学会58回大会論文集 712.
- 懸田孝一 1995 平仮名文の“読み”の範囲と速度について 日本心理学会59回大会論文集 619.
- 神部尚武 1986 漢字仮名まじり文の読みの過程 日本語学, 5, 58-71.
- 加藤秀俊 2000 四つの自由化(加藤秀俊監修『日本語の開国』) TBSブリタニカ
- 川越菜穂子 1991 日本語の話しことばと書きことば 日本語学, 10, 68-76.
- 金明哲・樺島忠夫・村上征勝 1993 手書きとワープロによる文章の計量分析 計量国語学, 19, 3, 133-145.
- 小林正幸 2001 なぜ、メールは人を感情的にするのか ダイアモンド社
- 国立国語研究所 1987 国立国語研究所報告89—雑誌用語の変遷 秀英出版
- 森謙一・山根一眞・古瀬幸広・荻野綱雄 1988 ワープロで何が変わったか 日本語学, 7, 11, 5-21.
- 森岡健二編著 1991 改訂近代語の成立—語彙編 明治書院
- 中村功 2001 携帯メールの人間関係(東京大学社会情報研究所編『日本人の情報行動2000』) 東京大学出版会
- 中山恵利子 2001 『厚生白書』のカタカナ語 日本語科学, 10, 国立国語研究所, 国書刊行会
- 野村雅昭 1972 漢字かなまじり文の文字連続(国立国語研究所報告46『電子計算機による国語研究(5)』) 秀英出版
- 野村雅昭 2000 漢字をつかわない日本語へ(加藤秀俊監修『日本語の開国』) TBSブリタニカ
- 太田一郎 2001 パソコン・メールとケータイ・メール—「メールの型」からの分析 日本語学, 20, 10, 44-53.
- 佐竹秀雄 1980 若者雑誌のことば—新・言文一致体— 言語生活, 343, 46-52.
- 佐竹秀雄 1989 若者の文章とカタカナ効果 日本語学, 8, 60-67.
- 佐竹秀雄 1991 新言文一致体の計量的分析 武庫川女子大学言語文化研究所年報, 3, 1-14.
- 佐竹久仁子 1988 漢字と仮名の使い分け 日本語学, 17, 138-142.
- 佐藤栄作 1991 若者のカタカナ使用と外来語表記—語種意識から 日本語, 10, 76-88.
- 東京大学社会情報研究所編 2001 日本人の情報行動2000 東京大学出版会
- 土屋信一 2000 漢字使用の新しい傾向 計量国語学, 22, 7, 303-305.
- 辻伸久 1983 現代日本語文字表記法の特質(大塚明郎監修 井上和子編『講座現代の言語1 日本語の基礎構造』) 三省堂
- 安本美典 1963 漢字の将来—漢字の余命はあと二百三十年か— 言語生活, 137, 46-57.
- Yomiuri on line 2002 ひらがな名の合併自治体、続々誕生(2002年2月11日)

